

## 『うつほ物語』における言語認識

### ——仲忠と実忠があて宮に贈った物からの一考察——

武藤 那賀子

〔キーワード…①『うつほ物語』 ②物に書かれた文字 ③藤原仲忠 ④源実忠 ⑤あて宮〕

#### はじめに

『うつほ物語』には、手紙を贈る他に、手紙と物、そして文字を書きつけた物を贈る場面が多くある。他の作品ではあまり目にする事のない「物に文字を書きつける」という行為が多く見受けられることから、『うつほ物語』におけるこの行為の意味を考えていく必要がある。文字を書きつけた物を贈る行為は、とくにあて宮求婚譚で多く行なわれている。源涼や源仲頼などの求婚者たちがあて宮にたくさんの手紙と贈り物をするが、その中でも、藤原仲忠と源実忠があて宮に贈った手紙や文字を書きつけた物の多さは群を抜いている。このように、物に書きつけられた文字とはいったい何だろうか。

また、文字が書きつけられる物が変化することによって、実忠・仲忠とあて宮との関係も変質する。仲忠は、俊蔭の娘と藤原兼雅との間の一人子で、容姿・才能ともにすばらしいことが何度も語られている。また実忠は、あて宮の父源正頼の兄季明の三男であり、将来有望な人物であることが随所で言われている。

この二人の物語については、既に大井田晴彦を始めとする先行研究<sup>①</sup>で述べられているが、「手紙」や「贈り物」という観点からの論及は、これまでにはない。また、これまでに仲忠と涼を比較する研究は多かったが、実忠と比較した研究はほとんどなかった。

本論では、仲忠と実忠を比較することにより見えてくる、仲忠と実忠の描かれ方の相違のもつ意味について考えていくとともに、「書きつく」ことは「物に直接文字を書いた」ことであると結論づける田中仁を始めとした先行研究の成果<sup>②</sup>を受けつつ、さらに一步踏み込んで、物に文字を書きつける意味とは何かということを考えていく。

## 一、実忠からの文字を書きつけた贈り物

実忠は、「藤原の君」巻から「菊の宴」巻までに、計四回、あて宮に文字を書きつけた贈り物をしている。流れを見るために、最初の三例を挙げる。

### ①宰相、めづらしく出で来たる雁の子に書きつく、

「卵の内に命籠めたる雁の子は君が宿にて孵さざるらむ

とて、日ごろは」とて、「これ、中のおとどにて、君一人見給へ。人に見せ給ふな」とて取らせ給へば  
(中略) 兵衛、賜はりて、あて宮に、「巢守りになり始むる雁の子御覽ぜよ」とて奉れば

(藤原の君 七一頁) ③ ④

②かくて、源宰相は、なほ、かの兵衛の君に、思ふことを語らひつつ、「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」となむのたまひける。花桜のいと面白き花びらに、

「思ふこと知らせてしかな花桜風だに君に見せずやあるらむ

これをだに」とて書いて、兵衛に、「これ御覽ぜさせ給へ」とて取らすれば、「いと恐ろしきこと。かかる聞こえあらば、兵衛が身は、何の塵泥にならむ」と聞こゆれば、「何の。殊なること聞こえさせたらばこそあらめ。花御覽ぜさすばかりにこそ。『何心ありて』とかは見ゆる。なほ、おいらかに参り給へ」。

(藤原の君 七三頁) ③

③白銀の薫炉に、白銀の籠作り覆ひて、沈を搗き飾ひて、灰に入れて、下の思ひに、すべて黒方をまろがして、それに、

「ひとりのみ思ふ心の苦しきに煙もしるく見えずやあるらむ

雲となるものぞかし」と書きて、「兵衛の君の御もとに」とてあれば、  
(藤原の君 七四頁)

これらの贈り物に対し、あて宮は一度も返事をしない。実忠とあて宮の仲介人であり、あて宮の乳母子であ

る兵衛の君の立場も苦しくなる一方である。これら三つの例は、記事と記事の間隔があまり開いていないため、時間の上でも間を置いていないことがわかる。つまり、実忠は、短期間でこれら三つの贈り物をしたことになる。多くの場合、文字は紙に書かれるが、実忠は試行錯誤の末に、短期間で文字を書きつける物を変えているのだ。このことから、少なくともこの期間、実忠はあて宮のことを考え、どうやったらあて宮の興味を引くことができるかということばかり考えていたのではないかと推測できる。しかし、あて宮は返事をくれない。そこで、③の直後、実忠は兵衛の君に絹・綾などを入れた「をかしげなる蒔絵の箱」（藤原の君 七四頁）を贈り、引き続きあて宮との取次ぎを頼む。その際に、あて宮に贈ったものが、次の例である。

④例の宰相、川島のいとをかしき洲浜に、千鳥の行き違ひたるなどして、それに、かく書きつく。

浦狭み跡かはしまの浜千鳥ふみや返すと尋ねてぞ書く  
（藤原の君 七五～七六頁）

この贈り物を持つてきた兵衛の君に対し、あて宮は、続く場面で以下のような反応をする。

「あやしく、例の、むつかしき物、常に見せ給ふ」。兵衛、「常に見知らぬやうなり」と聞こゆれば、「例のごと、のたうべかし」などのたまひて、書きつけ給ふ。

「浜千鳥ふみ来し浦に巢守り子のかへらぬ跡は尋ねざらなむ

とこそは、君の御言にてはのたまふべかなれ」とのたまふ。  
（藤原の君 七六頁）

実忠への返事として書いたわけではない、という体裁を採りながらも、実忠と同じものに文字を書きつけ、きちんと返事をしている。この場面は、あて宮が、初めて実忠に返事をする場面である。

以上のように、実忠からあて宮への贈り物は、短期間で雁の子、花びら、金属でできた作り物、自然の景物を模した作り物と変化している。そこに、実忠があて宮を想って考えたがゆえの工夫が見えることから、これらの贈り物には、実忠の「あて宮から何とかして返事をもらいたい」という想いが表れていると読むことができるのではないだろうか。そして、その実忠の想いに突き動かされるかのように、③で、贈り物が自然物から作り物に変化したときに、あて宮は「をかしげなる物にこそあめれ」（藤原の君 七四頁）と、贈られてきた物に対してやつと興味を示す発言をする。さらに④で、③よりも趣向を凝らした贈り物をして初めて、実忠は返事がもらえるのだ。ここまでに見てきた用例からは、文字を紙に書くのではなく、物に書くという工夫の他に、文字を書きつける対象を選択する工夫があり、さらに、選択した「物」に関する言葉を、そこに書きつけた和歌に詠み込むという、贈り物の差出人である実忠の工夫の数々があると分かる。そして、こうした差出人の数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという構図が見える。

④の後、十五回は物を伴わない手紙を送るものの、再び実忠はあて宮に文字を書きつけた物を贈る。しかし、それは、「鈴虫」（吹上・下 二九七頁）、「草木」（菊の宴三三三頁）といったものであった。贈り物に工夫を重ねて、④で返事を貰えた実忠だが、「鈴虫」「草木」に対するあて宮からの返事はない。これは、実忠が贈ったものが、自然物から作り物へと変化した後に、再び自然物へと戻ったからだと考えることができる。つまり、「鈴虫」「草木」の例を見る限り、実忠は、自身が④まででやってのけたあて宮から返事をもらうための法則に

気付かず、贈り物の質が落ちたということができないのではないだろうか。

「鈴虫」「草木」を贈ったものの返事を貰えなかった実忠は、あて宮宛の手紙を兵衛の君に託す。その際に、兵衛の君にあて宮への取次ぎを頼むべく、「蒔絵の置口の箱一具に、綾・絹畳み入れ、夏の装束、綾襲にて入れて」(菊の宴 三四三頁) 渡している。兵衛の君はそれらを受け取り、あて宮に手紙を見せるが、あて宮はやはり返事を出さない。

それでも諦めきれない実忠はこれに続き、「をかしげなる沈の箱一具に、黄金一箱づつ入れ」たもの(菊の宴 三四三頁)、また「白銀の箱に黄金千両を入れ」たもの(菊の宴 三四四頁)を兵衛の君に贈ろうとするが、両方とも兵衛の君は受け取らない。

以上のように見ていくと、兵衛の君は、最初は実忠からの手紙を受け取り、あて宮に見せていたが、最後には実忠から自身に対しての贈り物すら受け取らなくなっている。これについて実忠側から考えると、実忠は、兵衛の君という仲介人を通してあて宮との距離を縮められたにも拘わらず、原因不明なまま、あて宮から返事を貰えないばかりか、肝心の仲介人との距離すらも開いてしまったことになる。

実忠からあて宮・兵衛の君への贈り物の流れを一通りみたところで、次に仲忠についてみていく。

## 二、仲忠からの文字を書きつけた贈り物

仲忠が物に文字を書いて送る場面については、拙稿「物に文字を書きつけること——『うつほ物語』の仲忠の例から——」<sup>(6)</sup>で検討したことがある。拙論の最後のところを引用しておく。

仲忠が物に文字を書きつけるようになったのは、手紙や自分のあて宮への想いをあて宮付きの女房である孫王の君に伝えるように頼んでも効果がないことが契機であった。そして、そこで文字を書きつけたのは、花びらや葉などの、自然の景物であった。自然の景物に文字を書き始めた時点では、あて宮から返事が来ることが多かったが、しかし、「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先」で文字を書いたものには、返事が来なかった。そこで、仲忠は今度は作り物に文字を書きつけるようになる。そして、あて宮求婚譚の最中に仲忠があて宮に贈ったものは、金や銀で作られた非実用品であった。

あて宮が春宮に入内することが決まったときに仲忠があて宮に贈ったものは、実用品に変化する。あて宮求婚譚が終結したことで、宴の席では文字を書きつけた物を使用した軽快な遣り取りが行われる。しかし、いぬ宮の入内を視野に入れたとき、仲忠は再び、あて宮に非実用的で華美な贈り物を贈るようになる。仲忠が物に文字を書きつける場面にはこのような流れがある。

仲忠が文字を書きつけたものの変化について見通したこの拙稿の記述をふまえて、本論では、さらに考察を加えていくことにしたい。仲忠が文字を書きつけたものが変化することの意味を以下で検討する。

⑤ をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

(春日詣 一五〇頁)

⑥ 仲忠、「あて宮に、いかで聞こえつかむ」と思ふ心ありて、かく来歩くなむありける。さて、おのづ

から殿人になりて、御達などに物言ひ懸けなどする中に、孫王の君とて、よき若人、あて宮の御方に候ふにつきて、この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへつつあるに、さてのみは、えあるまじければ、面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく。

秋萩の下葉に宿る白露も色には出づるものにざりける

とて、孫王の君に、「これ、折あらば」とて取らす。持て参りたれば、あて宮見給ふ。

(嵯峨の院 一五九―一六〇頁) ⑦

⑦ 仲忠、空蟬の身に、かく書きつけて奉る。

(祭の使 二〇五頁)

⑧ 藤侍従、五月のつごもりの日、朽ちたる橘の実に、かく書きつけて、

(祭の使 二二三頁)

仲忠が初めて物に文字を書きつけたのは、⑥のあて宮に求婚する場面である<sup>(8)</sup>。この場面では、仲忠が「あて宮に、いかで聞こえつかむ」と考えていたことが、まず語られている。これは、仲忠が「殿人」になり、正頼邸に出入りするようになったころの話である。そこで知り合った孫王の君というあて宮付きの若い女房に、あて宮への想いを「ほのめかし言」いはするものの、孫王の君は「つれなくのみいらへつつある」という反応しか返してこない。そこで、このままでは進展が望めないと悟った仲忠は、「面白き萩を折りて」その葉に和歌を書きつける。すると、それまでは知らぬ顔をしていた孫王の君が、そのままあて宮に和歌を書きつけた萩を持って行く。あて宮の元に手紙を持って行ってくれることのなかった孫王の君が、和歌を書きつけた植物



は持つていつてくれたということだろうか。これは、和歌そのものというよりは、和歌、ひいては文字を書きつけた「物」が重要になってくるということではないか。

王朝物語では、手紙と植物をセットにした「付け枝」「折り枝」が多く出てくる。しかし、これらとは違い、この場面的ように、文字を直接物に書くということは、文字は記号としての機能を超えて、その裏側に実体としての物がはりついていることになるわけであり、文字はいわゆる記号ではなくなったことを意味する。ここでは、仲忠自身の想いを強調するものとして文字が機能するようになっていっていると考えてもよい。あて宮に近づくためには、手紙を送る・求婚の意志があることを示すといった求婚の仕方では効果がなく、そのために仲忠は、物に文字を書きつけるという手段を取ることで、文字を物化させ、自身の想いを強調することによって、あて宮からの返事を得ることができたのだ。

ここで注意したいのが、⑤～⑧で、仲忠があて宮に贈った、文字を書きつけたものが、「をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、「空蟬の身に」「朽ちたる橘の実に」と全く自然の景物であるということである。だが、次の⑨で仲忠が文字を書きつける対象物は変化を見せる。

⑨月の面白き夜、今宮・あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵琶・箏の琴、面白き手を遊ばし、月見給ひな  
どするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と聞  
くに、静心なし。「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」など思ふにも、母北の方の御ことを  
思ふに、なほ、いとほしく思はゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入って、孫王の君に、「など  
か、一日の御返りはのたまはずなりにし」。いらへ、「侍従の君と、御碁遊ばす折なりしかばなむ」。(中

略)侍従、「いくそ度か、思ひ返さぬ。されど、さてのみは、えこそあるまじけれ。いかがせむ」。孫王の君、「物なのたまひそ」とて立ち入れば、「見給へ。さ聞こゆとも、よに悪しきわざせじや」などて引きとどめて、「まめやかに、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな。さはありぬべしや」。「いで、あなむくつけ。時々なたまふ返り言、いと聞こえがたうし給ふを、とかくしてこそあれ。思ほしだにかくこそ、いとめざましけれ」。(中略)侍従、龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先しで、かく書きつけて、奉る。

「浅き瀬に嘆きて渡る筏師はいくらのくれかながれ来ぬらむ

かく思ふ給へては久しくなりぬるを、いかで、今宵だに、一言だに聞こえさせてしかな。いらへこそなたまはざらめ。聞こし召すばかりには、何の罪もあらじ」とてなむ奉る。宮、見給ひて、「いづこにあるぞ」とのたまふ。孫王の君、「東の簀子に」。「さは、琴弾きつるは聞きつらむな、あな恥づかしや。皆、上手ぞや。我は、聞かじ」とて入り給ひぬ。侍従聞きて、「あな心憂のことや。なほ、あが君仏、今宵ならずとも、たばかり給へ。人よりも、『親に仕うまつらむ』と思ふ心深きを、かかる思ひつきにしより、片時世に経べくは思ほえねば、今更に不孝の人になりぬべきがいみじければ、『いささか思ひ静まるや』とてなむ」と、泣く泣く、夜一夜物語し明かして、つとめて、黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に、かく書きつけて奉れたり。

夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき

とて奉れたり。

あて宮、物ものたまはず。孫王の君、「この度は、なほのたまはせよ。殊に物ものたまはせず、静かな

る人の、心魂もなく泣き惑ひ給へば、いとほしくなむ」と聞こゆれば、「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」とて、白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ、書きつけて遣はす。

川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ

などのたまふ。

(祭の使 二三五～二三七頁)⑨

これは、仲忠が、あて宮の弾く箏の琴と今宮の弾く琵琶を立ち聞きしている場面である。あて宮の琴の音を聞いた仲忠は、「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」と考える。これは、仲忠が初めてあて宮に文字を書きつけた物を贈る、⑥の破線部「あて宮に、いかで聞こえつかむ」と考える場面に通じるものがある。さらに、孫王の君には、「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」と手紙を送っても返事がなかったことを問うている。その後、仲忠は孫王の君に「まめやかには、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな」と頼み込んであるものの、孫王の君はとりあってくれない。これに対し仲忠は、「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先して」和歌を書きつけるが、あて宮は仲忠に自身の琴の音を聞かれたことに対し「恥づかしや」と言つて奥に入ってしまう。つまり、⑥の時とは違い、紙以外のものに文字を書いて贈ったのにも拘らず、この場面ではあて宮からの返事はない。そのため仲忠は、翌朝に、今までのような自然の景物ではなく、作り物である「黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に」文字を書きつけてあて宮に贈る。この結果、あて宮は、「白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ」て、そこに文字を書きつけて仲忠に返事をする。このあて宮からの贈り物は、仲忠からの贈り物に対応しており、おなじような返しではないことがわかる。この時点で、仲忠とあて宮の関係は、他の登場人物たちとは一線を画すものとなる。そして、この場面を契機として、仲忠は、

これ以降、文字を直接物に書くときには、対象となる物を自然の景物から作り物に変える。

### 三、物に文字を書くことの意味

仲忠、実忠ともに、あて宮への文字を書きつけた贈り物が、紙から自然物へ、自然物から作り物へと変化していき、結果として、作り物に文字を書きつけたときに返事がもらえたことは、見てきたとおりである。では、作り物に文字を書きつけたとは、どういうことだろうか。先述したが、仲忠にとって、自然の景物に文字を書きつけることは、手紙を書くだけでは得られなかったあて宮からの返事を得るために講じた手段であった。特に、⑨は、仲忠があて宮への想いを一層強くしている場面である。そんな肝心な場面で、自然の景物に文字を書くという今までの方法では返事が貰えなかった仲忠は、次の策を講じる必要がある。

まず、現段階で行なっている方法の欠点を考えると、自然の景物は時間が経てば経つほど劣化していくという問題がある。多くの場合、手紙とは保管しておくものである。この物語においても、手紙を保管する場面は数例ある。しかし、自然物に書いた文字は、受け取った際には読めても、時間が経過してしまえば読めなくなってしまう。このようにして文字が消えてしまえば、差出人の想いの強さも同時に掻き消えてしまうことになる。つまり、物に書かれることによって記号以上の機能を発揮した文字は消えて読めなくなってしまう、何の役にも立たなくなってしまうのだ。ならば、劣化しない、作り物を贈ればよいことになるのではないか。腐ったり劣化したりしない作り物に書かれた文字は物と一体化して永遠に物として存在し続けるため、その機能を失うことはない。

では、どのような贈り物をするべきだろうか。次の⑩⑪の例を見ていく。

⑩ 仲忠は、……置口の衣箱一つに、あるが中に清らなる女の装ひ一具畳み入れ、一つには麗しき絹・綾など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の船に物入れながら、かく聞こえて、あて宮に奉る。

荒るる海に泊まりも知らぬうき船に波の静けき浦もあらなむ  
とて奉り給へり。

さて、宮・君達など、「ありがたく興ある物かな」とて、ののしりて見給ふ。かくて、集まりて、見ののしりて、『持たらばや』と思へど、わざとある宝々しき物なり」とて、使には、白張一襲・袴一具賜ひて、かくのたまひて遣はす。

波立てば寄らぬ泊まりもなき船に風の静まる浦やなからむ

とて、返し遣はしたれば、仲忠、「いと心憂し」と思ひて、「かう聞こえて、御返り言も賜はらで来ね」とて奉る、

さもこそはあらしの風は吹き立たためつらき名残りに帰る船かな  
とて奉れつ。

(吹上・上 二七六頁)

⑪ かくて、御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御祓へするほどに、藤中將の、御祓への物取り具して奉る、黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、かく聞

こえ奉る。

月の輪のかけてや世々を尽くしてむ心を遣らむ雲だにもがな

と聞こえたり。あて宮、

雲にだに心を遣らば大空に飛ぶ車をばよそながら見む

とて返しける。

(菊の宴 三三三頁) <sup>⑩</sup>

⑩は、吹上浜から帰還した仲忠が、涼から贈られた宝物を、都の人々に配る場面である。仲忠は、「黄金の船に物入れながら」あて宮に贈った。しかし、これは返歌とともにそのまま返されてしまう。それを再び仲忠が贈り返し、「情けなきやうにもあり」という理由から、あて宮はこれを受け取る。

⑪は、いよいよあて宮が春宮に入内することが決定しそうな時期の、上巳の祓の場面である。仲忠があて宮に贈ったのは、⑩と同様、金銀で作られたものであった。

文字を書きつける物が変わる転機となった⑨から⑪までに、仲忠があて宮に贈った文字を書きつけた物はいずれも金や銀で光り輝くものであり、素材もさることながら、その細工も細かいものであることがわかる。つまり、贈り物としては最高級の品物である。しかも、⑨よりは⑩、⑩よりは⑪と、素材がよりよいものになっていく。このことは、自分に対してなかなか良い返事をくれないあて宮に対する仲忠の焦りを表しているといってもよいだろう。

次に、あて宮が入内した後に、仲忠が文字を書いた贈り物をした場面を見る。

⑫ 仲忠の中将の御もとより、蒔絵の置口の箱四つに、沈の挿櫛より始めて、よろづに、梳髪の具、御髪上げの御調度、よき御仮髻・蔽髪・釵子・元結・えり櫛より始めて、ありがたくて、御鏡・畳紙・菌黒めより始めて一具、薫物の箱、白銀の御箱に、唐の合はせ薫物入れて、沈の御膳に、白銀の箸・薫炉・匙、沈の灰入れて、黒方を、薫物の炭のやうにして、白銀の炭取りの小さきに入れなどして、細やかにうつしげに入れて奉るとて、御櫛の箱に、かく書きて奉れたり。

唐櫛筥あけ暮れ物を思ひつつ皆むなしくもなりにけるかな

とて、孫王の君に、夏冬の装束して心ざす。御使、さし置きて帰りぬ。

(あて宮 三五四～三五五頁) ⑪

この場面は、あて宮が春宮に入内することが決まり、入内の準備をしている最中に、仲忠が入内の祝いの品を贈った場面である。ここで贈られているものは、入内の祝いとしてはオーソドックスなものではあるが、他の求婚者たちの贈り物に比べ、豪華である。参考までに、他の求婚者たちからの贈り物を挙げておく。

・涼からの贈り物 (あて宮 三五五頁)

源中将、夏冬の御装束ども、装ひなど麗しうして、沈の置口の箱四つに畳み入れて、包みなど清らにて

・実忠からの贈り物 (あて宮 三五五頁)

さるいみじき心地に、え聞き過ぐし給はで、兵衛の君に、装束して心ざし給ふとて

他の(元)求婚者たちとは一線を画する豪華な贈り物をする仲忠であるが、この場面以降、仲忠からあて宮に贈られる物は、そこに書かれる和歌の内容と一致しなくなるという変化が起こる。一見、何かしらの意味をもった贈り物に、違う内容の和歌が書かれるようになるのだ。

以上を振り返ると、①～④の実忠が文字を書き付ける対象の変化と、⑤～⑨の仲忠が文字を書き付ける対象の変化は、ほぼ同じだといえる。このことから、実忠の場合には詳しい描写はないが、文字を書き付ける対象が変化する理由は、実忠と仲忠で、大差はないと考えられる。

時間軸に注意して見ていくと、実忠の求婚の後に、新たな求婚者として登場する仲忠の求婚の仕方は実忠のそれと重なり、また、両者は共に、将来有望であることが述べられていることから、実忠と仲忠の人物像が、一時的ではあれ、重なったことを示しているかと思われる。実忠の場合と同様、数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという方法は、この仲忠の例から見えてくる。しかし、両者には大きな違いがある。「吹上・下」巻で実忠はこれ以降に文字を書く対象を元に戻してしまい、一方の仲忠は⑩～⑫にあるように、実忠とは異なつて、文字を書き付ける対象をさらに変化させていくのだ。

そもそも、物に文字を書きつけるとは、どういったことなのだろうか。仲忠・実忠を含むあて宮求婚者たちは、最初の求婚の際に、必ず文字を書きつけた物を贈っている。しかし、一般的には「求婚」する際には、手紙などの、言葉のみを贈ることが主になるはずである。仮に物があつても、物は物、手紙は手紙というように弁別的に機能している。『うつは物語』内でも、帝や春宮、上達部などが俊蔭の娘に求婚した時は、手紙のみの求婚であつた。手紙は、文字の書き方、和歌の出来、紙の選択などから、差出人がいかに受取人を想つてそれを書いたかが分かるものである。しかし、そこでは文字を書く対象は、いかに工夫をこらそうとも、紙以外



ではない。それに対し、物に文字を書く場合は、書き得る対象が無限であるため、手紙よりも様々な戦略をとることが可能である。文字を書き得る対象が無限であるということは、それだけ差出人が頭を悩ませ、工夫を凝らす必要があるということも意味する。つまり、差出人が一つの贈り物をする際に、多大な労力を要するということでもあるのだ。そのような大掛かりなことをしてまで文字を書きつけた贈り物をするということが、差出人の想いの強さを示していると言える。また、これまで見てきた用例からもわかるように、文字が書かれた贈り物とは、贈り物それ自体がそこに書かれた言葉が示す内容を端的に表している。贈り物としてある物が、和歌のメッセージそのものと一致しているわけであり、受取人は、文字と物との一致したことによる言葉のパワーに直截にふれることとなる。そしてこのようなあて宮求婚譚にみる言葉に対する認識のあり方は、手紙のみで行なわれる一般的な求婚譚とは根本的に異なっているのではないのか。

言葉が元来非実体的な記号現象としてあるなかで、物に言葉を書きつけるという行為は、言葉を物それ自体にすることと同義だということである。ただたんに言葉だけを贈るよりも、贈り物がそれと不即不離の状態にあることで言葉に強度が生まれ、差出人の想いの強さを表出することができる。文字を書きつける対象の選択と、文字を書きつけるという行為そのものの両側から、差出人は、自身の想いの強さを表出しているのだ。求婚譚という場において、いかにして自分の言葉をあて宮に受け取ってもらえるかという試行錯誤の結果が、これまでに見てきた実忠・仲忠の例なのではないだろうか。ここには、物化した言葉という、求婚譚という祝祭の时空ならではの言語認識があると言えるのではなからうか。

あて宮求婚譚におけるこれらの試行錯誤は、仲忠によって、黄金・白銀などを細かく加工したものに様々な物を入れるという形態で極められる。では、あて宮求婚譚が収束を迎え、言葉が物を必ずしも必要とはしなく

なった物語の後半では、仲忠はどのような物に文字を書きつけるのであろうか。以下に見ていく。

殿上に、酒飲みののしりて、鍋の蓋の返り言は、物取り食ふ翁の形を、御膳まろがして作り据ゑて、それに、かく書き給ふ。

「白妙の雪間搔き分け袖ひちて摘める若菜は一人食へとや

羹時は、まだ過ぎ侍らざりける」とて奉れ給ふ。

(蔵開・中 五四七頁)

これは、仲忠が、殿上の間で源涼、藤原季英、良岑行正などの人々と一緒にいるところに、藤壺から贈り物が来た後の場面である。ここで注意したいのが、孫王の君と仲忠の遣り取りが⑫までとは違い、軽快なものとなっていることである。この後の場面を読んでいくと、やはり軽快な遣り取りが続く。求婚ができなくなった今、冗談を言い合うなんとも和やかな場が広がっているのだ。このように求婚譚を終え、落ち着くかのように思えた仲忠だが、実はそうではない。物に文字を書きつける回数は激減したものの、それに反比例するかのように、手紙がその数を増やす。言葉が物から離れて、言葉それ自体として増殖するようになっていく。

しかし、次の場面では、求婚時代を髣髴とさせるような贈り物が再び出てくる。

右大将殿、大いなる海形をして、蓬萊の山の下の亀の腹には、香ぐはしき裏衣を入れたり。山には、黒方・侍従・香衣香・合はせ薫物どもを土にて、小鳥・玉の枝並み立ちたり。海の面に、色黒き鶴四つ、皆しとどに濡れて連なり、色は、いと黒し。白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、白銀を腹ふくらに铸

させたり。それには、麝香・よろづのありがたき薬、一腹づつ入れたり。その鶴に、

薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥

いづくよりともなくて、夕暮れのまぎれに昇き据ゑたり。

(国譲・中 六九四～六九五)<sup>(12)</sup>

これは、藤壺の第三皇子の九日の産養の夜に、仲忠が贈り物をした場面である。ここで仲忠が藤壺に贈ったものは、あて宮の春宮入内が決まった後の⑫で贈った物より、あて宮に求婚している最中の⑨～⑪で贈った物に類似している。また、ここで仲忠が贈っているものは、産養の品としてはやはりオーソドックスなものではあるが、他の元求婚者たちからの贈り物についての言及がほとんどないことから、仲忠からの贈り物が注目に値するほど豪華であったことがうかがわれる。

また、これと類似した場面がある。

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。『みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らす』と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。

仲忠は、「手本四卷、色々の色紙に書きて、花の枝につけて」藤壺の若宮たちに贈っており、藤壺あてに手紙もある。手本は藤壺が所望したものではあるが、ここで贈られた手本は、これまでに仲忠が贈ってきた物以上に価値のある、仲忠自作の豪華な贈り物だといえる。これらの贈り物は、立坊争いの渦中で贈られたものである。藤原氏には梨壺が生んだ若宮がいるにも拘わらず、仲忠は、藤壺の若宮たちに贈り物をしている。

しかしこれは、仲忠が藤壺に求婚をしているわけではない。この時行なわれていたのは藤壺の第三皇子の産養だが、今上帝の第一皇子を生んだのも藤壺である。まだこの時点で第一皇子は立坊していないものの、藤壺の生んだこの皇子が立坊する可能性は高いと考えられる。また、この時すでに、仲忠には女一の宮との間に一女いぬ宮が生まれていた。藤壺の第三皇子の九日の産養に仲忠が贈った和歌と手本の場面からは、藤壺の第一皇子が立坊した際にはいぬ宮を入内させたいと仲忠が考えていたことが窺える。

さらに、「蔵開・上」巻に、次のような場面がある。

さて、赤き薄様一重に、「御文賜はるべき人は、まだ、目も驚きて、え。『なほ、聞こえさせよ』とて侍ればなむ。『思ほすやうに』とのたまはせたるは、なさは、所狭きやうに思されけむ。誰も恨み聞こえつべしや。まこと、『御ために』とのたまはせたるは、何ごとか。勧むる功德こそ侍るめれ。あぢきなき御怒りなりや。

『同じ巢に孵れる鶴のもろともに立ち居む世をば君のみぞ見む』

と聞こえさせよ』となむ」とて、裏に引き返して、私には、「いでや、『今は限り』と言ふなれば、なほこそ、

千歳をば今なりと思ふ松なれば昔も添ひて忘れぬかな」

と書きて、同じ一重に包みて、面白き紅葉につく。

(蔵開・上 四八三頁)

藤壺が仲忠夫妻に、いぬ宮の産養の贈り物をした際に、女一の宮の代筆という体裁で、仲忠が藤壺へ返信した場面である。そこには、「同じ巢に孵れる鶴のもろともに立ち居む世をば君のみぞ見む」と、藤壺若宮の立坊といぬ宮入内を願う気持ちを書かれている。この歌と、「薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥」(国譲・中 六九五)が類似していることから、仲忠が藤壺に対し、いぬ宮を次の春宮に入内させたいという意思表示を数度行なっていることがわかる。

では、言葉が物を必ずしも必要としなくなった中で、あたかも求婚時代のような、言葉が書かれた物を贈る意味とは何であろうか。誰が見ても求婚の意を示す和歌を、その和歌に使用している言葉を具現化した物に書いて贈るということは、差出人が和歌の、特に強調したい言葉を物によって表現しているということである。例えば、⑨において、仲忠があて宮に贈った和歌は「夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき」であったが、この中の「夜」「涙川」「こひ(鯉)」を物としてあて宮に提示することによって、和歌という文字だけのメッセージよりも分かりやすく、より強く自分の想いを表出しているのである。このような贈り物によって和歌の言葉を取りだし、強調するのは逆に、和歌の言葉とは関係のない贈り物をするようになった理由は、登場人物を取り巻く状況が、「想い」を露骨に表出してはいけなような状態に変わったため

ではないか。求婚譚というある種の熱気を帯びた空間が終結し、冷静さを取り戻した物語内の空間においてなお、贈り物に文字を書きつけて贈り合う藤壺と仲忠の間には、求婚譚の空間が持続しているのだ。しかし、両者とも、既に日常となった宮廷社会に生きる人物でもある。だからこそ、かつての求婚者であった仲忠は、いまなお自分との間に特殊な空間を持つ藤壺だからこそわかる方法で、自分の娘であるいぬ宮を次の春宮に入内させたいという意思表示を行なったのではないだろうか。このように考えると、仲忠が藤壺や藤壺の若宮に贈った、簡単に人の目に触れる贈り物は、日常でも通用するような「産養」「手本」といった意味を持つものとなり、読まなければ意味を把握できない、言い換えれば人の目に容易く触れない文字は、求婚譚という熱気を帯びた空間で贈与された、贈与物に書かれた文字と同じような意味を持つようになったのだと読める。このような空間では、何に文字が書かれているかということよりも、「物」に文字が書かれるということが大事なのではないか。

## おわりに

実忠と仲忠は、あて宮に対するアプローチの仕方から、一時的に人物像が重なる。それが分かれた大きな要因は、あて宮へのアプローチの変化の意義を自覚していたか否かによる語り分けにある。仲忠と藤壺の関係は、⑨において、特別なものとなる。求婚譚が終わった後も、仲忠と藤壺との関係においては、文字が書きつけられた豪華な贈り物を贈与するという行為が依然として行なわれていることになる。このように、求婚譚で確立した物化した言葉を贈るという方法は、求婚譚が収束した物語の後半において、人と人との関係を象る主たる

方法ではなくなったものの、特化した関係を浮き彫りにする方法として機能していることが解る。また、ここから『うつほ物語』における言語認識の何たるかもみえてくる。

元来、言葉とその指示対象とは一体化した状態にあったのだが、時が経つにつれて、言葉は言葉、物は物、というように分離し、言葉は実態の裏付けのない記号となっていたと思われる。そのような仮説が成立するならば、『うつほ物語』、特にあて宮求婚譚にあつては、分離してしまった言葉と物とを不即不離な関係にある原初的狀態へと還元しようとしていることになる。そして、言葉と物とが分離した世界を語る——言葉が物を必ずしも必要としなくなった——物語の後半においてなお、仲忠と藤壺の関係を言葉と物とが一体化したものであるとして語るにより、物に根拠づけられた求愛の言葉こそが力を持つという、この物語固有の祝祭の言語観がその全貌を現しているのではなからうか。

繰り返すが、『うつほ物語』における祝祭の言語観とは何か。それは、言うまでもなく、あて宮求婚譚という祝祭空間において贈与される、物に書かれた文字としての言葉である。それは、和歌（文字）を書きつける対象物をいかに和歌に合わせた物にできるかという、差出人の数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという方法、言い換えれば文字に対する『うつほ物語』独特の認識を根底に置いた上で成り立っている。これは、物語後半で多くの人々が遣り取りしている日常的な長文の手紙のあり方とは歴然と異なる。「藤原の君」巻から「あて宮」巻までは、求婚譚という熱気に包まれた祝祭世界が語られている。それ以降は、祝祭の熱気を引きずりながらも、物語世界は日常の言語世界に回帰していくがゆえに、文字は物から再び離れ、物に文字が直截に書かれるようなことは粗方なくなつたといえる。が、そのような日常の世界に回帰しても、いまだなお文字を書きつけたものの贈与を行なうのが藤壺と仲忠の二人

なのである。これはこの二者間のみで祝祭的気分が依然として持続していることを意味する。祝祭の終焉した世界を語る物語世界にあつて、藤壺と仲忠との間で交わされる言葉は一種異様にして特異である。仲忠が藤壺に贈ったものは、藤壺の受け止め方と、日常に身をおくそれ以外の者たちの受け止め方とは大きく異なる。たとえば、先掲した「国譲・中」巻（六九四～六九五頁）の場面で贈られた品物と和歌は、日常世界を生きている者たちから見れば、藤壺の若宮への産養の贈り物以外でないが、「蔵開・上」巻（四八三頁）での和歌を知っている藤壺から見れば、いぬ宮を次の春宮に入内させたいという仲忠の意思表示の言葉となる。また、「国譲・中」巻（六五四頁）で、仲忠が藤壺の若宮たちに贈った手本四巻は、日常側からすれば若宮の手習いという意味合いだけのものであるが、藤壺から見れば、自身への恋文とも取れるのであった。日常空間に身を置きながらも、藤壺と仲忠の間においてのみ、祝祭空間があるのだ。祝祭と日常的世界とが交錯するといわれる『うつほ物語』だが、本稿では、それを言語構造の問題として捉えるとともに、登場人物同士の関係をもそこに読みとるべく試みた次第である。

# 補記

本論文は、中古文学会三〇一一年度春季大会（至…二〇一一年五月二九日、於…日本女子大学）における口頭発表を基にしたものである。ご意見ご教示いただいた皆様に深くお礼申し上げます。

# 注

（１） 大井田晴彦『うつほ物語の世界』（風間書房、二〇〇二）の他に、竹原崇雄『宇津保物語』『菊の宴』におけ



- る実忠物語の構想」(『文芸研究』一一五号、一九八七・五)、齋藤正志「藤原仲忠の人物形成——〈秘琴〉(漢学)〈官職・御帯〉」(『二松』三、一九八九・三)、室城秀之「中古文学研究叢書」一「うつほ物語の表現と論理」(若草書房、一九九六)、中嶋尚「うつほ物語の人物映像——源実忠——」(『文学論叢』七六号、二〇〇二・三)などを参考にした。また、『うつほ物語』における手紙については、室城秀之の「『うつほ物語』の手紙文——特に、「蔵開」「国譲」の巻について——」(『古代文学論叢』一四、一九九七・七)などがある。
- (2) 田中仁「『書きつく』の意味——宇津保物語を主な資料として——」(『言語表現の研究と教育』三省堂書店、一九九一・三)の他に、杉野恵子「花びらや葉に歌を書く(書きつく)という表現について——「うつほ物語」を中心に——」(『実践教育』一九号、実践女子学園中学校・高等学校、二〇〇〇・三)などがある。
- (3) 『うつほ物語』本文は『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう・一九九五)により、適宜傍線を付した。なお、巻名とページ数については括弧内に記した。
- (4) 以下、本文の解釈に関わる異同のある箇所には傍線を引き、括弧内に他の本文を示すこととする。この箇所に、以下のような異同がある。
- 宰相、めづらしく出で来たる雁の子に(こと)書きつく(つつ)、  
雁のことを書いたという本文であるという考え方も可能であり、実忠は物に文字を書きつけていないと捉えることもできるが、この後に、実忠が物に文字を書きつける例が出てくると、杉野論の指摘を考えれば、ここは雁の卵に文字を書いたと捉えて良いと考えた。また、「書きつつ」と「書きつく」という表現にはなっていない本文もあるが、雁の卵に文字を書いたことには変わりはないと解釈した。
- (5) この箇所には以下のような異同がある。
- 花桜のいと面白き花びらに(おもしろくはなのひらけしに)、  
「……風だに君に見せずやあるらむ(よせずやあるらむ/みせずやありけん)  
花が開いている状態を示しているか否かの違いがあるのみで、ここは実忠が桜の花びらに文字を書いたということと間違いない。また、和歌にも異同があるが、歌意に大差はないため、今回は重要視しない。
- (6) 拙稿「物に文字を書きつけること——『うつほ物語』の仲忠の例から——」(『学習院大学大学院日本語日本文学』七、二〇一一・三)

(7) この箇所には以下のような異同がある。

面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく（書きつつ）。

(4) と同様の理由に、こども萩の葉に文字を書いたことに変わりはないと解釈した。

(8) 巻の順序は「春日詣」巻が「嵯峨院」巻に先行するが、時系列上、「嵯峨の院」巻は「春日詣」巻に先行するため、仲忠が物に文字を書きつけた最初の例は⑥ということになる。

(9) この箇所には以下のような異同がある。

黒方に（を）、白銀の鯉くはせて（にくはせ／しせ）、

黒方を白銀で造った鯉に食わせたと解釈するのが自然である。また、「白銀の鯉 しせ」は意味が通らない。状況に多少の差は出るが、しかし、続く「その鯉に、かく書きつけて奉れたり」に大きな異同がないことから、作り物に文字を書きつけたことに変わりはないと考えた。

(10) この箇所には以下のような異同がある。

皆金銀（こんく／こんかく／こうく／香具）に調じて、かく（にてうしてかく／てはく／てはかく／にてうしてかく）聞こえ奉る。

（中略）

とて返しける（かへし給ひける／かへしけり／うへしける）。

材料が明確になっていない上、続く「に調じて、かく」の異同も多い。しかし、この前にある「黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人」とこの後の「聞こえ奉る」に大きな異同はないため、作り物に言葉を添えていることは確実であろう。

(11) この箇所は、物の名称の異同等が非常に多いが、本論では物を贈っていることがわかれば良いため、言及しない。また、「孫王の君に」は「そわう」「そわ」「そは」などの異同があるが、こゝは、仲忠とあて宮の仲介を

孫王の君が行なっているため「孫王の君」であるとする従来の解釈に従った。

(12) この箇所も、物の名称の異同等が非常に多いが、(11)と同様の理由から言及しない。ただし、「右大将」が

「左大将」になっている本文がある。左大将は右大将である藤原仲忠の父兼雅だが、兼雅は、藤壺に対して、文字を書きつけた豪華な作り物を贈った例がないため、こゝは「右大将」と解釈した。

(13)

この箇所も、大きな異同がある。この箇所の異同については、大友信一「『右大將殿より』の「手本四卷」考」  
『就実論叢』第二六号 其の一（人文篇）一九九七・二）が詳しい。

Toward an Epistemology of Text in UTSUHO MONOGATARI:  
An inquiry of articles gave to ATEMITYA from NAKATADA and SANETADA

MUTO, Nagako

152

In UTSUHO MONOGATARI many letters are sent. AND we can also see many letters sent with articles, and many articles letters are written on them. An action of 'write letters on an article' is rarely seen in other literary works. But in UTSUHO there are many cases. So, it will be worthwhile to consider the meanings of the cases.

The actions can be frequently found in the part of 'Proposals of marriage to ATEMITYA'. Many suitors sent a lot of letters and gifts to her. And the quantity of letters and articles sent by FUJIWARA NAKATADA and MINAMOTONO SANETADA surpassed other suitors.

At first, proposing styles of these two noblemen are alike. But as articles letters are written on it change, relationship both between NAKATADA and ATEMITYA, and between SANETADA and her also change, and the two noblemen's styles became different. This difference was brought mainly by whether each of these two has sense to understand an importance of changing the style of proposal.

In UTSUHO, languages of the carnival are those written on articles sent in the 'Proposals' which can be interpreted as a space of carnival. This structure is based on a unique understanding of letters this story has. In the space, the recipient replies because she understand and be impressed by sender's emotions which can be found in a gift article, a result of his many inventions trying to fit articles to letters or *waka*.

It is said that in UTSUHO, carnival and everyday mix. This paper is a trial to grasp this mixture as a structure of languages and comprehend relationships of characters from it.

(日本語日本文学 博士後期課程三年)

